同行

平成28年7月1日
第43号
発行　梅花流師範・詠範の会
会長本間雅憲
題字　初代会長・故加藤信三師
編集者（広報部）亀谷隆道

梅花流師範・詠範の会事務局
大仙市協和　太寧寺　伊藤道人
電話（0188-96-2029）

ふりにし世々の罪咎は
深雪のごとくふかくとも

悔ゆる心の朝日には
消えて跡なくなりぬべし

太祖瑩山禅師七百回大遠忌へ

秋田県梅花流師範・詠範の会　会長　本間雅憲

東日本大震災からこの三月で五年の月日が経ちました。いまだ仮設住宅での生活を続けている方々、仮設住宅を出て新たな生活を始める方々、いまだ他県での生活を余儀なくされている方々等々それぞれが複雑な思いの中で日々を過ごしておられることと思います。

一方、シャンティ国際ボランティア会が行っていた被災地での移動図書館活動は、それぞれの自治体等にバトンタッチするそうです。五年が経過し新たな支援活動が始まっているようです。続けて寄り添い、支援していきたいものです。

さて、總持寺二祖峨山韶碩禅師六百五十回大遠忌が無事円成しました。二祖様のご遺徳を偲び、あらためて讃仰御和讃・御詠歌（永光）を繰り返しお唱えいただきました。

さらに八年後の平成三十六年に、太祖瑩山紹瑾禅師七百回大遠忌を迎えることになります。今後大円成に向けての行持が続いていきます。梅花流詠讃歌における太祖様に関する曲は「紫雲替節」から十曲以上あります。これを機に、太祖様のご生涯・御教えを今一度学び、一曲一曲さらなる研鑽を深め、お唱えし、太祖様の御恩に報いていきたいものでございます。

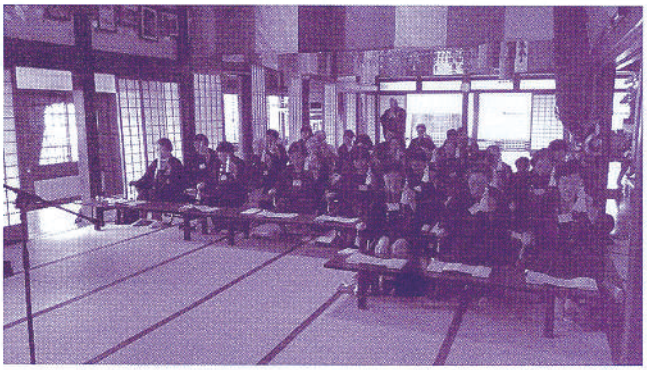
中央・県南一泊講習会に参加して

昨秋、九月十八日と十九日の二日間、由利本荘市の恵林寺において「梅花流講員一泊講習会」が行われました。
中央県南地区の各梅花講より三十八名の参加者を集め、浅田特派師範をはじめとした七人の講師陣によって真面目に、熱心に、軽快に、厳粛に、じっくりと研修した。夕食は安楽温泉に移動しての懇親会となり、講習よりも一層にぎやかに盛り上がりました。
今回、ひょんな理由で「習おうとしたら講師になってしまった」恵林寺副住職の本間秋彦さんから貴重な体験談が届いておりますので、報告を兼ねて梅花への想い、成長の記録を述べて頂きます。

第四教区　恵林寺副住職　本間秋彦

「秋彦さん、お願いね」自分の耳を疑う一言から始まった一泊講習会でした。

講習会当日の朝、普段なかなかお会いできない師範の先生方が一堂に集まる講習会とあって、今回どの先生の講習を受講しようかと、ワクワクしながら私は講習会の日程表を眺めておりました。しかし、そのワクワクも束の間……講師陣の中に急遽欠席の連絡があり、講習は初心者～上級者までの三会場に分れて行われるため、講師の人数が足りないという事態に。そして嫌な予感というのは的中してしまうもので、まさかまさかの「秋彦さん、お願いね」という展開になってしまったのです。講習をすること自体全く初めての経験というわけではありませんでしたが、まさか今日この場で今から私が講習をするなどとは微塵も思っていなかったため、心の準備もままならないまま、ワクワク気分から一転……。きちんと講習が出来るだろうか、私の講習で受講者の方々に満足して頂けるだろうか……。様々な思いが頭をめぐりました。しかし、悩んでる時間もなく、とにかく今自分にできる精一杯を出し切ろう、伝えよう、という思いで講習に臨ませて頂きました。



私は初心者講習を担当させて頂いたのですが、講習が始まってすぐに私はあることに気付き驚かされました。それは受講者の方々の梅花に対する真剣な姿勢です。皆梅花が大好きで、もっと上達したい、もっともっと梅花を知りたい、そんな情熱・熱意に満ちた感情が、語らずともその目の輝きや表情、その場の雰囲気だけでひしひしと私に伝わって来るのです。これは中途半端にヘタなことはされない。……そう思わずにはいられない緊張感や責任感、様々な思いが私の中で自然とこみ上げてきました。そしてそれと同時に、私自身も梅花を始めた頃の初心がよみがえってくるような思いでした。講習時間は驚くほどに時間の経つのが早く感じられ、伝えたいことを伝えきるにはむしろ時間が足りないと思うほどでした。後になってもっとこうしたほうが良かったかな、こう表現した方が伝わりやすかったかな、果たして私の講習で満足して頂けただろうか、等々……振り返って考えれば考えるほど自

分自身の未熟さに反省の念は尽きませんが、そういった後悔や不安も「ありがとうございました。勉強になりました。楽しかったです」という皆様方からのあたたかいお言葉で、それまで私の胸にあったモヤモヤがフッと消えて、すべて救われたような思いになりました。

講習を終えて、当初は私が「指導をする」という意気込みで講習に臨んでおりましたが、それはとてもおこがましいことであったということに気付かされました。教わることの方が多かったからです。お作法や詠唱など、私自身理解していたつもりであっても、いざそれを人に言葉で伝えようとしても、なかなかうまくいきません。指導をする上で、限られた時間の中で何からどう伝えるべきか、また伝える際の表現方法であったり、一つ一つの言葉であったり、指導をするということの難しさを痛感いたしました。

そういったことから改めてこれまでの私自身の梅花への取り組みを顧みて考えてみると、受講をさせて頂く時、ただただ自分自身の上達の為の稽古が主であり、師範の先生方がどのように工夫をして指導されているかなど、そういった面に関しての意識は低かったように思います。今回の経験を経て、今後は私も一人の師範としてひと様に指導していく立場となる自覚と責任感をより一層持ち、そうした観点からの取り組みも大事にしていかなければと強く感じました。

思いがけずも講師として参加させていただき、様々な不安や葛藤の中で考えさせられることも多々ありましたが、それ以上に得るものも大きかったように思える貴重な一泊講習会でありました。そして今改めて思うのは、やはり「梅花が好きだ」という想いです。お誓いを胸に、今後も皆様と共に梅花の道に精進しまいりたいと思います。

テレホン梅花

☎〇一ハ一ハ七三一七六七六（ハナミ　ナムナム）

（毎週土曜日にテープが代わります。）

三月
五日　四摂法（和）
十二日　花供養（和）
十九日　香華
二十六日　供華

四月
二日　慶祝（和）
九日　花祭り（和）
十六日　御受戒（和）
二十三日　浄心
三十日　澄心

五月
七日　追善（和）
十四日　妙鐘
二十一日　三宝（和）
二十八日　正法（和）

六月
四日　地蔵（和）
十一日　慈念
十八日　修証義（和）
二十五日　伝心

七月
二日　梅花（高祖一）
九日　観音（和）
十六日　慈光
二十三日　開山忌（和）
三十日　真清水

※ご意見、ご要望等をお気軽にお寄せ下さい。

〒〇一〇-〇一一一
秋田市金足岩瀬字前山三
東泉寺（〇一八-八七三-二六七五）

梅花のふるさと

～詠讃歌の生まれた風景（その二十一）～

権藤円立先生と梅花流（一）

梅花流詠讃歌は真言宗・密厳流という流派の曲の借用から始まりました。最初の経典は昭和二十七年に発行されましたが、そこには紫雲や梅花、渓声など、現在、伝承曲と呼ばれている九曲が収録されましたが、みな密厳流の曲に曹洞宗の歌詞を載せたものでした。

曹洞宗梅花流独自の曲は、昭和二十八年以降に発表されることになります。「三宝御和讃」「無常御和讃」「無常御詠歌」「坐禅御詠歌」「花供養御詠歌」「正法御和讃」の各曲が昭和三十年までに発表されました。これらの作曲をしたのが音楽家・権藤円立（ごんどうえんりゅう）先生（以下、敬称略）でした。この後「観世音菩薩讃仰御和讃（現在、削除）」「英霊供養御詠歌（現、大聖釈迦牟尼如来讃仰御詠歌）」「聖号」「大聖釈迦如来涅槃御詠歌」「大聖釈迦如来成道御和讃」を作曲しています。

権藤は、発足当初ほとんどが曹洞宗僧侶の集まりだった梅花流にとって、音楽の専門家として大きな役割を果たしました。今回から権藤の業績を紹介していくことにしましょう。

◇宮崎県・浄土真宗光勝寺◇

権藤円立（ごんどうえんりゅう）（一八九一～一九六八）は、明治二十四年一月、宮崎県延岡市の浄土真宗・光勝寺住職・権藤円海の五男として生まれました。円海は、大分県日田の有名な儒学者・広瀬淡窓（ひろせたんそう）の咸宜園（かんぎえん）で学んだ篤学の人でした。

子ども時代を光勝寺で過ごした経験から、後年、一つの曲が生まれています。権藤自身の文章でそのことを紹介しましょう。

私（円立）の幼少の頃、郷里で私の母達が先に立ち仏教婦人会を組織していた。この会は、毎月一回真宗の寺で集会した。その頃真宗の寺は四ヶ寺あったので廻り持ちに集会したものであった。集会の時は、その寺の住職によって仏前勤行。法話が行われ、法話が済んで歌を唱和し、その後でお茶を飲みながら雑談して散会という、極めてなごやかな会であった。（中略）私が小学校を終えたばかりの頃であったが自分の家で婦人会のある度毎に歌われる歌が、いつとはなしにすっかり身に沁み込んでしまっていた。昭和の初め、仏教音楽協会に、この婦人会の歌の曲を思い出して書きつけて出したら、皆非常に称賛した。藤井清水君が伴奏譜をつけて立派な曲譜となった。（中略）教会ではこれを汎仏教のものにということで、新たに作詞を野口雨情氏に依頼して出来上がったのが、現在方々で歌われている「うつし世」である。

この「うつし世」という曲は、さらに後になって権藤が手を加え、梅花流「観世音菩薩讃仰御和讃（現在は削除）」として発表されました。このことは、また後でふれることにします。

◇藤井清水・野口雨情との交流◇

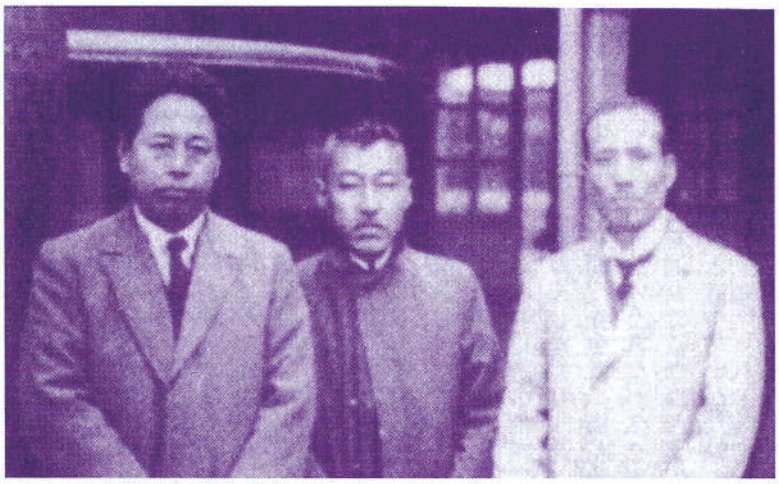
権藤は上京し東京音楽学校に進み声楽を専攻します。そこで生涯の友・藤井清水と出逢います。藤井は作曲家・山田耕筰をして「日本で最も優れた作曲家」と言わしめた音楽家でした。大正四年、音楽学校を卒業した後、権藤は一時兵役に従事、その後、福岡や佐賀で教員をしていました。藤井も同じ頃福岡で教員をしていましたが、藤井の大阪転出を機に、大正十一年、三十一歳の時、権藤

宮崎県延岡市・光勝寺山門

も大阪へ移りました。

大阪に移った二人は、音楽による社会活動をめざし「楽浪園」を結成します。これに当時、童謡・民謡詩人としてすでに有名であった野口雨情が合流し、以後「三羽烏（さんばがらす）」と呼ばれ、三人による音楽活動が始まりました。それは野口による童謡・民謡についての講演、野口作詞・藤井作曲の歌を、藤井の伴奏で権藤が歌うという形式の講演演奏活動でした。その活動は全国各地で評判を呼び、満州・朝鮮にも及びました。楽浪園の活動は、大正十三年に「芸術教育協会」として発展し、坪内逍遙（作歌）、小原國芳（教育学者）、中山晋平（作曲家）、山田耕筰（作曲家）、北原白秋（詩人）など多くの協力者を得て、大正時代を代表する文芸活動となりました。

「楽浪園の三羽烏」と呼ばれた頃の三人
左から権藤円立、野口雨情、藤井清水



この頃権藤は、野口に師事していたはな代という女性と結婚します。〈ささのはさらさら〉で始まる「たなばたさま」ははな代夫人の代表作です。

三人の活動はその後東京へ移ります。東京・武蔵野市吉祥寺に住まいのあった野口の誘いに応じて大正十四年、権藤夫妻が野口宅近くへ、翌年には藤井もその近所へと転居し親交が続きました。

時代は昭和を迎え、三人の音楽・芸術活動はいっそう盛んになりましたが、この頃、社会において宗教的な情操教育への関心の高まりから、仏教音楽活動が注目されていました。昭和三年には文部省内に「仏教音楽協会」が創設されます。権藤等三人はこの時の評議員でした。

また昭和初年頃より権藤は、幅広い歌唱教化活動を展開していました。浅草・浅草寺境内にある仏教青年伝道館の日曜講演において、さらに巣鴨刑務所や川越少年刑務所の受刑者、墨田電話局の女性交換手、葬祭業・東京博善会職員など多彩な対象を相手にしたものでした。次の文章は権藤自身による巣鴨刑務所での歌唱指導のようすです。

最初に行ったのは、丁度彼岸の中日であった。同じ色の着物を着た、全収容者一千名が一堂に集められて、粛然として微声だにしない。会堂の正面に立った時は、名状しがたい厳粛な感にうたれた。はじめ中道の講話があった。その次が私の歌唱指導である。オルガンのないことは前から承知していたので、木魚を用意しておいてもらった。私は壇に立つなり、一つポコッと木魚を打った。皆はびっくりして私を見た。中には「ふふふ」と笑い声をもらすものもあった。私は開口一番「これは中道ですな！」と、また一つポコッと打った。皆ドッと笑った。まず歌う気分はこれで満点と思った。

木魚を打ちながら私が範唱する。その通りに皆が幾回か繰り返し、やっとどうやら、ついてゆけるようになった。最後に私も一同も、一斉に木魚のリズムによって唱和した。一番最初私が木魚を打って歌い出した時は、皆おかしさを我慢しているような表情であったが、次に一斉に歌い出した時は、おかしさ、珍しさ、面白さがゴッチャになったような表情になった。中にはわらい声をもらす者さえあった。繰り返して進むうちに、収容者たちの目は輝き、頬は紅潮してきて、講話の時とはまるで違った生き生きとした喜びの表情が見えてきた。唱和が終わったら、何かうごめくような、つぶやきとも、ささやきともつかない唸り声のようなものが起こって、私が退場するまで、その感動の声は消えなかった。

この異常なる光景に、私は全く驚いてしまった。今まで学校で、永い間音楽の授業を通して、涙をさそったことはあったが、未だかつてこんな高揚した感激のあふれた光景に出会ったことはなかった。うたというものが、かくも人の心に作用するものか。唱和するということが、こんなにも人の心を感動させるものかということを、あまりにも如実に体験した私は、いよいよこれは捨ててはおけないと思うたのであった。

（つづく）

「宗侶・寺族・梅花流一泊研修会に参加して」 研修報告

『誓いの梅花』の講習をいただいて

今年は暖冬にて、積雪量も比較的少ない初春を迎えた。その一月下旬の寒中の時季、秋田キャッスルホテルに於いて「宗侶寺族一泊研修会」が開催された。特別拝請講師として新潟より須戸秀圓師範先生を招き、ほか分科会においては山中律雄師範先生、佐藤俊晃師範先生、浅田高明師範先生等の御指導をいただき充実した研修となりました。

特に今年で三年目の最後となる須戸先生の講習は、明るく厳しくほがらかな発声と共にその梅花に対する思いは胸に響くものがありました。

二日目の最後の講習の時間、先生は「梅花流詠讃歌の中には〈誓い〉〈願い〉という言葉が多く出てくる。誓いの梅花といっても過言ではない。私達はこの誓いを、願いをしっかりと守っていかなければならない。」と申されました。

まず最初に「お誓い」～〈私たちは〉を、〈私は〉に置き換えて自分自身に問いかけてみる（自発的自覚）。正信心を持って仲良く生活し明るい世の中を作る、ことを誓う。詠讃歌を通して。そして指導者として。

次に「開経偈」～尊いご縁によって百千万劫生まれ変わりの中で仏法と詠讃歌と皆様に出会うことができた。その慶びを同行同修の仲間達と分け合い学び会って会得　する。願わくば仏さまの教え、想いに近づくために。

「三宝御和讃」～〈誓いを願うものはみな〉、すべての苦しむ人々を救おうと誓う仏さまに救いを願うならば、その教えに従って生きるべし。

南無帰依仏。

「修證義御和讃」～〈誓うこころぞ仏なる〉、我は仏にならずとも生きとし生けるものみなを漏らさず救い助けんとする心。自未得度先度他。利他行。

「太祖常済大師瑩山禅師御詠歌」～〈ひたすらにかける願い〉、多くの苦しむ人々を救う、さらに女人成仏をひたすらに願う心。

「四攝法御和讃」～〈幸せねがいもろともに〉、皆の幸せを共に願う。物を分かち合い、仏の教えを学び合う。布施。

「大聖釈迦牟尼如来成道御和讃」～〈久遠の願い深くして〉、「四弘誓願文」の煩悩無尽、法門無量、仏道無上が一番から三番に入る、永遠なる苦から解き放たれることを願う。

「観世音菩薩御和讃」～〈深きがゆえのおん誓い〉、迷いの深き底に沈む衆生、その人々の音声を聴いて救いの手を差し伸べる。慈愛に満ちた菩薩の誓願。

「地蔵菩薩御和讃」～〈代受の誓い深ければ〉、衆生の苦しみを代わりに受けて下さる。慈悲行の菩薩。

「太祖常済大師瑩山禅師誕生御和讃」～〈願いかないて生まれしは〉、観音様に誓願をかけた母、懐観大姉様。救世の功徳を供えた御子を授かり有難き。

「太祖常済大師瑩山禅師讃仰御和讃」～〈常世に人をわたさんと誓いたまいし大禅師〉、人々の苦しみを救い仏の世界に導く事を誓い大導師になられました。

「太祖常済大師瑩山禅師影向御和讃」～〈誓いの誓願たてたもう〉、母の遺言を護り「女人救済」を誓う。

「開山忌御和讃」～〈誓願高くかかげつつ〉、正伝の仏法を伝え広めることを誓う。

「平和祈念御和讃」～〈仏前に悔いて誓わなん〉、御仏の前にて懺悔し、争うことの無い平和な世界を作ることを誓う。

「誓願御和讃」～四弘誓願文の意。

〈衆生無辺誓願度〉、誓って世の中の人々の幸せの為に尽くします。他を思いやる心を持つ。

〈煩悩無尽誓願断〉～煩悩、自我、欲望を制御しブレーキをかける。

〈法門無量誓願学〉～誓って仏さまの教えを学び、生きる羅針盤と致します。

〈仏道無上誓願成〉～誓って仏さまの教えを実行し、悔いのない人生を送ります。

これほどの多くの願いや誓いが梅花の中に込められている。その心を微細に渉り詳しくご講習くださいました。我々は、詠唱、作法、所作のみならず、梅花のその心を汲み取ってお唱えし、伝えて行かなければならない。そうしなければ梅花流の誓願である『お誓い』に近付くことが出来ないと気付きました。梅花を唱えることによって、心が笑顔になる。そして心からの笑顔で答える。

最後に先生は、地蔵菩薩御和讃にあるように〈御寺の門のあるところ、笑顔あかるくおわします〉寺に来る人を笑顔で迎え、笑顔で帰っていただけるように、私はありたい、と。そしてあいさつは、「ラ」の音であいさつする。明るく高い声で、と述べられました。

須戸先生の「誓い」のご講習に深く感謝申し上げ、報告とさせて頂きます。

（第十教区　太平寺　亀谷隆道）

ちょっとぶじょほう ～梅花つれづれ～

御詠歌を通しての私と檀信徒の絆

東光院 副住職　遠藤隆幸

私は秋田県大仙市にある寺の副住職をしております。私の地域では御詠歌を御檀家さんが聞く機会がほとんど無い地域で御詠歌とは何ですか、というような地域でした。

私自身も大本山総持寺で修業時代に初めて聞く御経ではない供養の御唱えでした。本山では、月一回の梅花講習の時間を大切にしており修行僧だった私も習いました。

御詠歌とは鈴と鉦を使い、綺麗な響きに歌詞を乗せて仏様やご先祖様に御唱えし、誰にでもわかる言葉で仏教の教えを伝えることです。しかし、本山では毎日が必死でしたので御詠歌の大切さに気が付くことなく自坊（自分の寺）へ戻りました。そんな環境の中で、私は師匠に御詠歌習ってみないかと言われましたが、最初から素直にやりますとは言えませんでした。「私だけこの地域で習得しても意味ないのではありませんか」その一言で普段温厚な師匠が強い口調で「やったことも無いヤツはそれを言う資格すらない、ただそれは御詠歌から逃げてるだけだ、その意味が分かるまで檀務（檀家さんの法事など）に出るな、御経では伝わらないことを御詠歌では伝えることができるんだぞ！」私は師匠から喝を入れて頂き、御詠歌と真剣に向き合ってみる決意をいたしました。

いざ始めてみると幼少の頃からスポーツしかやってきてない私にはリズム、歌詞、所作がなかなか身に付かず、自暴自棄になったときもありました。しかし、覚えたての御和讃を法事で御唱えさせて頂き、その御檀家さんは初めて聞く御和讃にとても良い詞ですねと喜んで頂きました。この時、師匠が言っていた事はこの事だったんだと気が付きました。

それからは毎回私の寺では法事に御詠歌を御唱えしております。歌詞を檀家さんに渡して一緒に見て頂くようにし、唱えられる方は一緒に唱えて頂いております。今では初めて御唱えした法事から、はや三年の月日がたちました。「法事で御詠歌やってくれてありがとう、心にすーと入ってきました綺麗な鈴の音ですね、私たちも御唱えできますか？是非教えて貰えないですか」と言うありがたい言葉をいただきました。

私のお寺では去年の冬に東光院梅花講（仮）を立ち上げました。講員さんの希望で、時間をかけてゆっくり教えて下さいとお願いされました。私は御詠歌はわかりやすい御経だと思っております。御唱えが上手な人、そうでない人、歌詞がわからない人、それぞれの悩みはあると思いますが、私たち僧侶は御経も御詠歌も唱えることが大事で唱える事で自分や回りの皆様に功徳があるのだと私は思っております。

私は御詠歌はすごいな、これが御詠歌の力なんだなと思った事があります。御詠歌を根強く信仰している地域での寺院法要のでの出来事です。葬式のなかで、一人の和尚様が御詠歌を出棺の時に御唱えしました。すると一人、また一人瞬く間に御檀家さんも御唱えを始め、気が付けば和尚さん御檀家さんの御唱えで本堂の中が御詠歌で包まれていきました。私はこの何とも言えない空間に心を奪われました。単純に凄い、御詠歌の力を再度感じた瞬間で私は御檀家さんの佛心に感銘いたしました。

私のお寺でも講員さん、御檀家さんと手を取り合ってお互いを尊重し、佛心を育て一歩一歩前に進んで行きたいと思っております。私の僧侶人生はまだまだ始まったばかりですが皆様と共に未熟者ですが御詠歌を通してすべての御檀家様と心が繋がるよう日々精進してまいりたいと思います。

合掌

梅花行持ご案内

○「仏教講座と御詠歌のお唱え」がありました。

今月、七月二日に秋田市「エリアなかいち」のにぎわい交流館4F研修室において仏教講座が開催されました。その時に師範の先生方による御詠歌も奉詠されました。仏教の勉強でしたが、御詠歌も印象深かったみたいです。詳細は次号に。

○梅花特派講習会巡回無事終了

今年もまた梅花特派師範の先生が来られました。三名の先生がそれぞれ各地区を巡回しての講習。年に一度の本物の直伝の講習。いかがだったでしょうか。朝霧の中を歩けば衣が湿るが如く、その場所に居るだけで、皆さんもたっぷり梅花の露に浸ったことと思います。教えていただいた、詠唱・所作・作法・歌心・心持ち・等々をしっかり修め、自分のものにしてください。佐藤道春師範、中村祥嗣師範、大竹広真師範、ありがとうございました。

●禅センター梅花講習

【檀信徒講習会】（午前十時半～午後三時）

九月二日（金）彼岸御和讃　香華
十月七日（金）達磨大師御和讃　廓然
十一月十一日（金）四攝法御和讃　高嶺
十二月二日（金）菩提　慈光

※課題曲を確認してお気軽にご参加ください。初心者、上級者の二会場に分かれて講習。受講は無料です。

●梅花流秋田県奉詠大会

日　時　七月十二日（火）
開場・受付　九時
開　会　午前十時三十分～
終　了　午後三時（予定）
会　場　秋田県民会館にて

◎今年の奉詠大会は昨年と同様、全県一堂開催として秋田市で行われます。場所は今回初めて「秋田県民会館」での開催となりました。午前中からの開催となる為、昼食が必要となりますが当会館での飲食は禁止となっており、となりのジョイナスという施設での昼食となります。移動となりご負担をお掛け致しますがご了承下さい。各寺院梅花講講員さんは、日頃の練習の成果を信仰信心の祈りに満ちたお唱えをご披露して頂きたいと思います。また来場は自由ですので、御詠歌を知らない多くの一般の方々にも来て頂き（誘い合って）、ご観覧下さい。なお、駐車場はありませんので公共交通機関か貸し切りバス、乗り合いにて降車し民間駐車場をご利用下さい。

●檀信徒講員一泊研修会

◎県北地区

日時　九月六日（月）～七日（水）
会場　北秋田市鎌沢 正法院（地蔵大仏のお寺）
宿泊　あゆっこ温泉
定員　一〇〇名
〆切　八月十日（定員になり次第締切）

～以上の予定で計画中です。参加希望の方はお早めに各寺の講長さんを通してお申し込み下さい。会費、詳細、日程等は講長さんに連絡済みです。

◎中央・県南地区はまだ未定。

●検定会のお知らせ

◎県北地区
九月十九日（月）敬老の日
会場は未定

◎中央・県南地区
十一月十日（木）
会場～さとみ温泉

＊両会場とも、二級教範まで受験可。

※今現在の確認済みの情報です。夏が過ぎた頃に課題曲が発表されますので、わかり次第、次号に掲載いたします。それまでに「真田丸」を観ながら力を蓄えてください。良き太平の世を作るまで。

お詫び

この度、当号（第四十三号）の発行が大幅に遅れ多大なご迷惑をお掛け致しました。この場を借りてお詫び申し上げます。

また、師範詠範の会会長、各執筆者はじめテレホン梅花情報をお寄せ頂いた柴田師範先生にはその梅花敷衍布教の愛情を遮ることになってしまい、大変申し訳なく心よりお詫び申し上げます。

殊に前々頁のテレホン梅花はじめ各行持のご案内は、開始開催前に告知発行することが出来ず、梅花講員の皆様には「参加、習得、研鑽」の機会を失してしまったこと、深く反省しております。

ご案内の行持が終了して事後報告となり申し訳ありませんが、今後はこのような事が起きないよう気を引き締めて発行する所存です。ほんとうに申し訳ございませんでした。

（広報部　編集亀谷）